

## \* 「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介 \*

「未来を築く子育てプロジェクト」は、  
3つの募集事業によって、すこやかな子育てと夢のある未来づくりを応援します。

### 「エッセイ・コンクール」

子育て・子育てにまつわるエッセイを幅広く募集します。地域社会や家族ぐるみで助け合う事例など、子どもが社会性を習得し自立するための創意工夫である子育てを紹介します。子育ての苦勞を乗り越え、子どもが自立していく過程で、周囲が得る気づきや喜びなどの「子育てのすばらしさ」を伝えていきます。今年は、男性の子育て参加はもちろんのこと、熟年世代、地域ぐるみの子育ての事例など、幅広い方からの応募をいただきました。

### 「子育て支援活動の表彰」

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。地域の小さな団体にも着目し、ロールモデルとなりうる特徴的な子育て支援活動を表彰しています。価値のある活動の他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育ての不安を払拭します。

### 「女性研究者への支援」

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

## 目 次

「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介	2
ごあいさつ	3
講評	4
エッセイ・コンクール	6
子育て支援活動の表彰	12
女性研究者への支援	22
第2回受賞者のご紹介	26

# \* ごあいさつ \*

## 「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員長



### 堀田 力

[ (財) さわやか福祉財団理事長、弁護士 ]

選考の過程で、応募の内容が回を追うごとに充実したものになっていると感じ、社会に発するメッセージとしても、より時代にあった意義深いものになっていることに感銘を受けました。たとえば、エッセイの受賞作品からは、仕掛けても生まれないような助け合いが自然発生的に行われている状況を感じることができましたし、子ども達が自分たちの力で育っていくことを重視した活動が出てきていることにも大いに共感を覚えます。その一方で、子育てをしながら学術研究を続けることの困難さを抱えている多くの女性の現状を見ると、私たちの社会がまだまだ変わっていかねばならないことも痛感しました。本プロジェクトを通して、社会にしっかりとメッセージを発信できればと思います。

## 「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員



### 横山 進一

[ 住友生命保険相互会社取締役会長 ]

このプロジェクトも第3回を数えることとなりましたが、いまさらながら、「子育て」に関する見方、切り口には色々なものがあるということ、応募作品や活動内容を通じて強く感じました。「子育て」を多面的、多角的に把握する能力を養わなければならないと、改めて考えさせられた次第です。少子化によって、子ども同士が接する機会が少なくなっています。そんな中、参加した誰もが互いに成長し、より良い人間関係を養っていきけるような活動を続けているものが少なくありませんでした。これからの日本社会には、そういった環境がますます必要になると思いますし、このプロジェクトを通じて、そういった環境が広まっていく支援ができれば、たいへん嬉しいことです。

## 募集結果

第3回「未来を築く子育てプロジェクト」では、2009年6月から9月までの間、「エッセイ・コンクール」、「子育て支援活動の表彰」、「女性研究者への支援」の3部門の募集をいたしました。「エッセイ・コンクール」には1,417編、「子育て支援活動の表彰」には161組、「女性研究者への支援」には135名のご応募をいただきました。12月中旬に開かれた実行委員会で最終選考が行われ、各部門の受賞者が決定しました。

	応募数	
エッセイ・コンクール	1,417 編	内閣府特命担当大臣 (少子化対策) 賞 / 最優秀賞から1編 厚生労働大臣賞 / 最優秀賞から1編 最優秀賞 / 5 編 優秀賞 / 20 編
子育て支援活動の表彰	161 組	内閣府特命担当大臣 (少子化対策) 賞 / 未来大賞の1組に授与 厚生労働大臣賞 / 未来大賞の1組に授与 未来大賞 / 未来賞から2組 未来賞 / 6組
女性研究者への支援	135 名	スミセイ女性研究者支援 / 9名

## 「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員

### 池田 守男

[ 株式会社資生堂相談役 ]



今回も大変素晴らしい選考になったと思います。どの選考結果もとてもメッセージ性が高く、このメッセージが日本全国に伝わり、これらの活動が草の根的に広がってくれることを期待しています。現在、全国の各地域は経済的な側面を見てもかなり疲弊している感があります。しかし、今回の受賞作品や活動を社会に発信することによって、地域のコミュニティの皆さんが、地域で子どもをサポートするという機運が出てくるきっかけになるのではないかと思います。子育てのみならず、学校へも地域社会が積極的にサポートしていける形につながっていけば素晴らしい地域社会になるはずです。このプロジェクトがその出発点になることを願っています。

### 大日向 雅美

[ 恵泉女学園大学大学院教授 ]



今回、受賞された女性研究者の多くは、30代後半から40代前半の母親です。この年齢でなおオーバードクターや科目履修生として研究継続の道を必死に求めている姿に、胸の詰まる思いです。必ずしも所属が保障されない立場で、成果がすぐには現れない人文社会学系の研究に粘り強く挑む日々の努力は、子どものあるがままを受け入れ、辛抱強く慈しみ育てる道のりと相通じるものがあります。本助成は単なる研究者支援ではなく、効率最優先の社会が見失ってきた大切なものに光を当てていることをあらためて痛感いたします。また、子育て支援活動では、わらべうたの伝承活動や地域に密着した熟年世代の活動、小児科医が不足している中、その隙間を埋めるように医師と母親との橋渡し役を果たす活動など、今まで以上に地域の特性に則した活動が成果を挙げていることを素晴らしいと思います。

### 奥山 千鶴子

[ 特定非営利活動法人びーのびーの理事長 ]



エッセイは、母親だけでなく、男性や地域社会の方など、子育てを取り巻く多くの方々から作品が寄せられたということが、今年の大きな特徴だと思います。子育て中の母親には、ちょっとした一言で笑顔が戻るような肩の荷が下りるような瞬間がありますが、そんな固い心が雪解けするような温かな出会いのエピソードがたくさん寄せられました。子育て支援活動の表彰では、自分達で必要な研修を行い、ネットワークを構築して行政、大学などとの連携を深めている団体や、障がいの有無に関わらず、赤ちゃんからお年寄りまで集える場所をつくり、地域に必要とされている活動、伝統的なわらべ歌を普及する活動、子どもたちとの関わりを通じて生き生きと活動する熟年世代など、多様な応募に支援の広がりを感じました。



## 金田一 秀穂

[ 杏林大学外国語学部教授 ]



社会全体が「効率」や「成長」ではなく、「ありのまま」でいいとみんながなんとなく思いはじめていると感じます。子育ても変化し、人工的でなく、子どもは自然に育つものであるという感覚に回帰している印象を、エッセイから受けました。女性研究者への支援は、「子どもがいても研究が継続できる」ことを応援するのが本来の趣旨かもしれません。しかし、今回の受賞者にも何名かいたように、「子どもがいるからこそできる研究を継続している」方も応援していければと思います。大学院のような整った研究環境のない方、科目履修生の方など、研究の継続が困難な立場にしながら子育てと研究を本当に頑張っている方に援助ができるのはうれしいことだと思っています。

## 吉永 みち子

[ 作家 ]



エッセイ・コンクールでは、これまでの「形」の支援から「意識」の確かな変化が生まれ、さらに幅が広がっていると感じました。高齢者が子供と友達化することで見守りとは違う関わり方とパワー発揮の新たな道を予感させてくれました。漫才のように独自の楽しみを発見して、父子でコミュニケーションを図るということも父親の参加の形を硬直的なものからグンと柔軟に間口を広げています。頑張りを支えながら、育児が本来持つ楽しさを共有するカタチが見え始めてきたように思います。子育て支援活動の表彰では、支援という入り口から、小児医療の問題、地域力の問題など、さまざま分野に理解を求める活動につなげていこうとする力に感銘を受けました。一方で、子どもを育てながら苦勞して研究を続けている女性がいるにもかかわらず、いまだに男性研究者中心のアカデミズムな社会の意識の遅れは際立ってみえ、正直憤りすら覚えました。



## 内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞 最優秀賞

### 「七十歳違いのともだち」 佐野 広美 [東京都]

十年近く暮らした人と別れて、私はもうすぐ三歳になる娘を連れて実家に戻ってきました。これが最善の選択だったはずなのに、親の都合でまだ何も分からない子供を巻き添えにしてしまった罪悪感と実家への気兼ねで、私の心の中は「ねばならないこと」でがんじがらめになっていました。一方、数ヶ月前から不穏な空気を感じ取って娘はすっかり無表情な女の子になっていました。

突然の保育園生活で疲れきった娘を見かねて、私の母が夕方の保育を引き受けてくれました。

実家のとなりに伯父夫婦が営む食堂がありました。お客さんが絶える三時過ぎになると近所のお年寄りたちが集まってきて、そこで毎日お茶のみ会が開かれていました。おばあちゃんたちは、マンション住まいで私以外の大人を知らない娘をお茶のみ会のメンバーに迎えてくれました。初めはもじもじしていた娘も、次第に優しいみんなの言葉がけになじんで話をするようになりました。

「今日は団子を買ってきたぞー」「このおせんべい食べてみて〜」

大人の中に一人ちょこっと座る娘のために、誰もが娘の好きなお菓子を持って集まりました。

昨今は子供が減って昔のような小さな子供との触れ合いがなくなったお年寄りたちにとって、突然現れた娘は太陽でした。また娘にとっても、再就職した忙しい私とのすきまを埋めてくれる大事なリラックスタイムだったのです。

やがて、園から帰る娘を道路に出て待っていただけるお茶仲間のおばあちゃんたちの姿を見つけると、母の手を振りほどきカバンを放り投げて「た・だいまぁ〜」と駆け出していくようになりました。

「たつこさぁ〜ん!」

名前を呼ばれ腕に飛び込まれたおばあちゃんが、「七十歳違いのこんなに可愛いともだちができるなんて幸せだね」と言った時には、みんな大笑いだったそうです。

こうして私は安心して仕事に専念できるようになり

ました。娘は私がない時間も大勢のお年寄りたちに見守られて笑顔を取り戻し、誰とでも話のできる活発な女の子に変身していきました。

沈みかけた娘を救ってくれたのは、実家の家族と、人生経験を活かして手を差し伸べてくれた地元のおじいちゃん・おばあちゃんたちの親身な優しさでした。あの時があってこそ、今こうして元気な私たちがいます。恩返しのためにも娘を大切に育てていきたいと思います。



#### 受賞の言葉

思いがけない受賞に大変感激しています。エッセイを書くにあたって写真や子育てメモを見ているうちに、日々の生活に追われて忘れかけていた、娘が小さかった頃のできごとが鮮明に蘇ってきました。今日に至るまで、両親・妹をはじめどれほど多くの人に助けてもらったことかと思いかえし、感謝の気持ちでいっぱいです。子育てを通じて世代を超えた人の優しさや懐の深い心に触れることができ、とても幸せに思います。

## 厚生労働大臣賞 最優秀賞

### 「トライ！」 大内 龍一 [千葉県]

「もしかしたら幼稚園駄目かも」いつも強気な妻が弱音を吐いた。娘は骨が折れ易いという先天的な疾患で幼稚園入園の歳でもまだ歩けなかった。それ故随分早くから幼稚園の受入を考えた妻は、長男が卒園した幼稚園の入園前保育に足繁く通い、受入の手ごたえも何度か聞いていた。それが、願書受付の1週間前にこんな話だ。二人で行った方が、熱意が伝わるのでは、と、私も仕事を休んで一緒に幼稚園に行く。しかし、幼稚園側の対応はまるっきり後ろ向きだった。「責任が持てない」と言う言葉に「責任を持ってもらおうと思っていない」とまで話したが、どんな会話も流れるばかりだった。

「どうしよう」駄目だった結果を抱え、呆然とした。娘は幼稚園に入るのを本当に楽しみにしていた。「他を当るしかないよね」、意見は一致した。とは言え、願書受付まで1週間。時間がない。私もそうは仕事を休めない。「とにかく当れるところを当てみよう」と、私たちはその足で市内の幼稚園を回った。

「うちでは設備がないので」「今までに受入れた経験がないので」どこもそんな回答だった。もう夕方が近かった。幼稚園も閉まってしまう寸前、これが最後と5件目に伺った幼稚園で初めて正面から受け止めた反応を得た。園長が不在だった為、後日改めてということになったが、私たちは希望を持って帰路につくことが出来た。

翌日、受入を前提に子供を連れてきて欲しいという連絡があったことを妻から聞く。週末に園長先生とお会いした。「設備は不足かもしれませんが、私たちも一生懸命考えます。ご両親も一緒に考えましょう。この子の為に、いい幼稚園生活を創っていきましょう」そう仰って頂いた。

翌春、晴れて幼稚園生になった娘は、全力で幼稚園生活を楽しんだ。歩けない不自由を沢山の工夫と協力で、新しい自由に変えていった。年中の運動会は、本番2週間前に左腕を骨折してしまい、腕を吊ったの参加になった。それでも全種目片手で出来る方法を考え出し、見事に完全参加した。年長の運動会



には、恒例の全員参加のリレーがあった。スタートを任された娘が必死に車椅子をこぐ姿、友達の声援、拍手……。勝手に涙がこぼれた。運動会の最後、園長先生が「みんなが頑張った、本当にいい運動会でした」と、声を詰まらせた。三人の子供の運動会に皆勤したが、そんな運動会は初めてだった。そこにいられることに深く感謝した。

卒園までの間、何度かの骨折があった。その度に周囲に沢山の動揺があった。でも、みんなでそれを乗り越えた。一番つらいはずの本人も、いつも笑顔で良く頑張った。

トライすること。全ての子育てが、常に初めてとの戦い、トライの連続だと思う。これからも、怖がらず、決して諦めず、そして大いに楽しんでトライしていきたい。

#### 受賞の言葉

末娘も小学校3年生、身体も随分大きくなりました。まだ歩くには至りませんが、自分の出来ることには、思わず笑ってしまうくらい、力の限り体当たりしています。そのエネルギーに、私は沢山の元気をもらっています。いつまで一緒に遊んでくれるものか、少々不安ですが、行けるところまで、力いっぱい子供たちとの時間を楽しんでいこうと思っています。今回は、このような素晴らしい賞をいただき、本当にありがとうございました。

## 最優秀賞

### ゆすらうめ 「梅桃」 糸井川 誠子 [岐阜県]

梅雨が明け、山々から潤った風が吹いて来ると、私の頭にはある風景が浮かんで来る。息子が小学一年の初夏のことだ。

1600gという小さな体で生まれた息子は小学生になってもひどく小柄な子だった。その小柄な体で小一時間かかる小学校まで通うことを考えると本当に心配で、入学当初は後ろからこっそり付いて行ったり、途中まで迎えに出たりしたものだった。小さな体に背負われたランドセルは息子の体をフラフラさせ、何度も肩からずり落ちそうになっていた。

道端の黄色いタンポポが綿毛になって飛んで行く頃、息子が言った。

「お母さん、もうお迎えに来なくていいよ。僕一人で帰れる。」

約束どおり迎えに行くのは止めたものの、やはり帰りの時刻になると外に出て、帰って来る方向を見つめてしまう日々であった。

その日は帰りがやけに遅かった。何かあったのだろうかとヤキモキしながら待っていた私の目に飛び込んで来たのは、手足にすり傷をし、服を血で汚した息子の姿だった。

「どうしたの？」と駆け寄ると、下校中に転んで怪我をした、鼻血も出たと言う。なるほど鼻には鼻紙が詰めてあり、手足のすり傷も手当てがしてある。近くの家からおばあさんが出て来てやってくれたと言う。泣いたのだろう、顔も赤く腫れていた。

ああ、やはり途中まで迎えに行けば良かった。どんなに心細かっただろう。そう思っていると、息子は小さな手を開いて手の中に握っていたものを見せた。「もう泣かんと、これ食べながら頑張って家まで歩いてお帰りって、そのおばあちゃんがくれた」

それは赤い梅桃<sup>ゆすらうめ</sup>だった。学校から家までのちょうど中間地点ぐらいの所に生垣に赤い実をつけた家があるのを思い出した。

「おいしかったよ。食べながら来たら痛くなかった。いっぱい食べながら歩いてたら、お家に着いちゃった。」  
何て有り難いこと。心の中で手を合わせた。自然に

涙が出て来た。この子はちゃんと地域に守られ、育てられていたのだ。今まで早産で小さく産んでしまったことに罪悪感を感じ、とにかく人並みに、と一生懸命育ててきた。いつの間にか、自分がこの子を守らなきゃ、と肩に力が入っていたのかもしれない。でも、知らないうちにこの子はちゃんと「地域の子ども」になっていたのだ。梅桃<sup>ゆすらうめ</sup>の甘酸っぱい香りが「一人で頑張らなくてもいいんだよ。」と言っているような気がした。肩の力が抜けて涙になって出て行くように感じた。

そんな私を見て、息子が手の平に最後に残った梅桃<sup>ゆすらうめ</sup>の一粒を差し出して言った。

「これ、お母さんにあげるからもう泣かんと。」

ああ。胸の中が温かいものでいっぱいになった。思わず息子をぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう。ありがとう。」

溢れる涙で、そう言うのがやっとだった。



#### 受賞の言葉

結婚して10年目に二男一女の三つ子を授かってから一番変わったのは、私自身だと思います。妊娠期から15歳になった現在まで、本当にたくさんの人に支えられ助けられてここまで来ました。子ども達と一緒に私も育てられてきた気がします。この話は、今、「ぎふ多胎ネット」や「ひろば」で子育て支援に関わるようになった私の原点です。これまでに受けた温かさを次の世代に伝えていくことが私の役目かもしれないと感じています。

## 最優秀賞

### 「よしよし」 伊藤 由佳 [山形県]

まだ長男が3歳、次男が1歳だったある日。私は幼い二人を連れて、食堂で昼食をとっていた。店内はお昼のピークを過ぎ、人がまばらになった頃。私は食べ終えて席を立ち始めた長男に声をかけつつ、次男に食事を与えていた。おとなしくしていない長男と、なかなか食べ終わらない次男。子ども達にかける私の声に、イライラが溶け始めていた。

その時、隣のテーブルを片付けていた店員のおばちゃんが声をかけてきた。

「子どもさん、いくつ？」

「3歳と1歳です。」

「かわいいねえ。」

「ありがとうございます。」

子ども達を褒めてもらったのが嬉しくて、私も思わず笑顔がこぼれた。イライラした気持ちが、ふっと緩んだ。そんな私に、おばちゃんはさらに声をかけてくれた。

「お母さん。若いのに頑張って子育てして、エライね。」

次の瞬間、私は一瞬何が起こったのかわからなかった。笑顔のおばちゃんは、子ども達ではなく私の頭を撫でたのだ。よしよし、とでも言うように優しく。

「いえいえ。」

謙遜して答えようと思ったのに、予想外の出来事に言葉が出なかった。かわりに、私の目からはポロポロと涙がこぼれた。母親としての無駄な気負いが解けて流れて、ただただ温かい気持ちに包まれるようになった。

おばちゃんは、うんうんと頷きながら  
「お母さん、頑張ってるね。」

と言い残し、自分の仕事に戻っていった。

考えてみたら、母親としての自分が褒められたのは、これが初めてだった。どんなに若くても新米でも、「母親」はなんでも出来て普通なのだ。幼い子どもを騒がせないのは、母親として当たり前。逆に子どもが騒げば、母親が悪いと責められる。私は、いつ責められるのではないかと気を張って、疲れてイ

ライラしてばかりいた。そんな私を、責めずに受け止めてくれたおばちゃんの優しさが、嬉しかった。

あれから、私はあの時の「よしよし」にずっと支えられている。母親として自信を失くしそうな時、イライラしてしまう時、私はおばちゃんを思い出す。思い出の中のおばちゃんは今も温かくて、思い出だけで、また頑張れる気持ちになるのだ。

お母さん達は、みんな頑張っている。皆がしていることだけど、みんな立派だ。世の中がもっと、頑張っているお母さん達を褒めてあげるようになったらいいと思う。お母さん達に褒め言葉をかけてくれる人が増えたら、幸せなお母さんが増えると思うから。そして幸せなお母さんからは、幸せな子どもが育ってくれるんじゃないかと思うから。



#### 受賞の言葉

このたびは素晴らしい賞を頂き、ありがとうございます。

たくさんの優しさに支えられ子育てをしてきましたが、特に忘れられない体験を書きました。子育てを支えてくれる家族や地域の方の存在は本当にありがたく、感謝でいっぱいです。今はまだまだ支えられてばかりですが、いつかは支える側になって、新米お母さんに優しさの輪を繋いでいけるようになりたいと思っています。

## 最優秀賞

### 「究極の親子コミュニケーション」 福岡 亮治 [京都府]

私は6歳の娘と親子漫才をやっている。親子漫才といってもプロのように巧みな漫才をするわけではない。お風呂や食卓など普段の家族団欒の時間を使って、言葉の掛け合いを行っている。親子漫才のきっかけは、娘が2歳の時。「私もまんじゃい(漫才)したい」私は同僚と職場の飲み会で披露する漫才を自宅で練習していた。そして、これはその同僚が帰った後の娘の一言であった。聞けば、「パパが楽しそうやったから」という娘。確かに同僚との漫才の練習の時の私は終始笑顔であった。子どもは親の背中を見て育つというが、まさか漫才をしている背中も見ているとは…。ということで我々の親子漫才が始まった。まずは同僚と飲み会用に考えたネタを娘とやってみる。「完璧とは言えないがセリフを覚えている!」「どうせ飽きるだろう」と思っていたが、「パパ、もう一回やろ」と何度も何度も漫才をしたがる娘。私もなんだか楽しくなってきた。気付けば妻が笑っている。その妻がビデオカメラで撮影を始め、お客さん兼カメラマンとなった。娘の提案でソファを舞台に見立てて漫才を行う。これで我が家にちょっとした漫才のステージが完成した。それから1年。3歳になった娘はまだ漫才を続けていた。さすがに1年間もやるとある程度の形になってくる。家族団欒の時間を使ったお遊びのような親子漫才であるが、「ここまで娘が頑張ったのだから」ということで漫才の大会に申し込むことにした。「漫才の大会に出場?」と近所の人たちは不思議そうに言うが、私からすれば、ピアノを習っている子どもがピアノ発表会に出場したり、野球をしている子どもが野球の大会に出場したりするのと同じ感覚。結果は、もちろん予選落ち。しかし、大会に向けての練習は我々親子にとってかけがえのないものとなった。お風呂で練習、食卓で練習、寝る前のお布団で練習。家の中でずっと娘と向き合ってきた。練習をするたびに上達する娘とそれを褒めちぎる私。本来ならば、私か娘に飽きがきてもよいものだが、私には「娘の成長をもっとみたい」、娘には「もっとほめ

られたい」という気持ちがあり、その気持ちが相乗効果を生み出し、飽きるどころかドンドン楽しくなってきた。それからさらに3年経ったが、今も小学校1年生になった娘と漫才を続けている。小さな規模ではあるが、漫才の大会で優勝できるくらいの実力になった。私にとって娘は、大切な1人目の子どもであり、最高の漫才の相手となった。先日、娘の小学校の授業参観を見に行った。1人でも大きな声で堂々と発表をする娘の姿を見て感動した。漫才をすることで娘は、人前で堂々と話すことができるようになっているのである。4年間の親子漫才への取組みは間違いではなかったと確信した。親子漫才は、我々にとって最高の家庭教育であり、究極の親子コミュニケーションとなっている。



#### 受賞の言葉

漫才を通した育児という変わった取組みにもかかわらず素晴らしい賞をいただき大変嬉しく思っております。現在は4歳の弟もお姉ちゃんの楽しそうな姿を見て「僕もやりたい」と言い始め漫才を特訓中です。今回の受賞を励みにこれからも妻やたくさんの人たちに助けをいただきながら育児を頑張りたいと思います。

氏名	タイトル	地域
畦地 哀	息子へ	神奈川県
生駒 春美	出会い	熊本県
伊藤 千秋	いつかわたしも……。	宮城県
上野 咲子	回数券	埼玉県
上野 貴也	やればできる男の子育て	愛知県
越後 久美子	子育てに必要なチカラ	北海道
大西 賢	今日からともだち	東京都
岡 直人	布オムツ	福岡県
金子 みどり	あなたのおかげで	茨城県
高木 朝子	ぶーちゃんママ大明神	愛知県
高橋 亜美	自立援助ホームで生きる子どもたちと共に	東京都
高橋 誠一	心和む「よそ孫」育て	千葉県
中村 祥子	りょうくんの絵日記	鹿児島県
中谷 ちなつ	都心にあるもう一つの故郷（ふるさと）	埼玉県
西野 範子	働きたいママに、息子からの素敵な贈り物。	大阪府
西村 睦	うちのニセばーちゃん	北海道
堀山 有里子	親見習い若葉マーク	埼玉県
馬島 友二郎	隣のなおくんから教えられたこと	埼玉県
山崎 太郎	神さまは見ている	福岡県
渡辺 真実	じじ友できたよ!	栃木県

## インタビュー

## “ニセばーちゃん”に聞いた「癒されるニセ孫育て」

今エッセイ・コンクールは、近所の高齢者に助けられている子育てをテーマにしたものが目立ちました。受賞作品の中にも最優秀賞の「七十歳違いのともだち」、優秀賞の「うちのニセばーちゃん」、「心和む「よそ孫」育て」、「じじ友できたよ!」などの作品が、そのような高齢者が見守る地域での子育て・子育てについて書かれていました。

そこで、「うちのニセばーちゃん」の主人公である井上美代さん（札幌市）に、地域内での子育て支援の状況などを伺ってみました。

● **きっかけは？**

町内会費を集めていたときに、1歳前くらいのかわいい女の赤ちゃんを見かけて、「今度遊びに来たら?」と声をかけたのが始まりでした。一度遊びに来てくれたら楽しくて、それ以来、お母さんが用事のある時などには預かったりする関係ができました。もう9年。今では下の男の子も遊びに来ています。

● **なぜ近所の子育てを？**

私の娘は神奈川に住んでいて、上の孫はもう成人しています。孫たちもきっと近所の人に助けられて大きくなっていったと思うので、私も近所のお子さんの面倒を見るのはごく普通のことだと思っています。町内も高齢化が進んで小さい子どもがほとんどいないので、みんなで大切に育てたいですね。

● **子育ての感想は？**

楽しいですよ。それに、私も主人も子どもたちに癒されています。自分では男の子を育てた経験がないので、男の子を育てるのは大変だなあと実感しながら、それでも楽しい毎日を送っています。

## \* 子育て支援活動の表彰 \*

私たちはこんな活動をしています!!

### NPO法人 子ども達の環境を考える ひこうせん

#### 参加者の声

子育て中の母親同士が集まって、子どもの成長を確認したり、  
情報交換したりして、ゆっくりと過ごさせてもらっています。

自分の子どもだけでなく、  
他の子どもにも目が届くようになりました。



### NPO法人 MMサポートセンター

#### 参加者の声

子どもに障がいがあることが分かったときはショックでしたが、  
障がいだと分かったことによって、対応も出来るようになりました。

施設は立派ではありませんが、指導者、スタッフ、  
そして親の会も含めて、子どもへの思いが溢れている場所です。



### 『知ろう!小児医療 守ろう!子ども達』の会

#### 参加者の声

子どもが病気の時にも慌てなくなりました。

落ち着いて、症状や受診のタイミングを  
見極められるようになりました。





## むくどりホーム・ふれあいの会

参加者の声

子育て中は、子どもと母親2人きりになる時間が多いので、みんなで一緒にお昼ご飯を食べることができることも魅力です。

児童館と違って、開放時間が長いので使いやすい施設です。

## 特定非営利活動法人 うていーらみや

参加者の声

友人に聞いて来ましたが、楽しかった。  
自分の子ども以外の子どもと接することができるのもいいですね。

毎回楽しいし、母親同士で話ができるところがいいと思います。  
お弁当を持ってきて、子どもと食べて帰ります。



## わくわく未来塾

参加者の声

嫌いな食べ物があるけれど、戦争中のことを聞いて、これからは頑張ってお腹いっぱい食べようと思いました(小学校6年生)。

資料では見ていたけれど、体験した人の話を聞いて、戦争の怖さを実際にも感じました(小学校6年生)。



## 内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞 未来大賞

### NPO法人 子ども達の環境を考える ひこうせん

岡山県備前市 代表者：赤迫 康代

#### 親子で参加。子どもと大人が育ち合う環境づくり

活動内容：「ふれあい交流広場」を開設し、備前市地域子育て支援拠点「わくわくる一む」の事業委託を受け活動。乳幼児の親子のための各種サロンを運営し、父親応援も行う。



#### 受賞の言葉

ひとりでも多くの子ども達が笑顔でいられることを願いみんなで手をつなぎ、育ち合いながら取り組んできた活動を認めていただき、本当にありがとうございました。

この喜びをこれからの力にしていきたいと思えます。

築100年の古民家を活用した「くるみの森」をふれあいの拠点として人と人の温かいつながりを育みながら、明日への種をまき続けていきたいと思えます。

#### 親と子の交流とあそびば

「NPO法人子ども達の環境を考える ひこうせん」は、焼き物のまち・備前市にある、築100年の古民家を中心に活動を行っています。大切な子ども期(特に乳幼児期)に、地域内で他の子ども達と一緒に育っていくためには、地域の担い手でもある親が主体となって取り組むことが大切だと考え、親子で活動に参加してもらうことを重要視しています。

活動拠点である「くるみの森」は、30畳ほどのゆったりしたスペースと外遊びも楽しめる裏庭を併設。2009年11月下旬の「3～4歳のひろば・あそびえん」の日には、スタッフと参加者の母親たちが、火をおこして焼き芋づくりをしました。その周辺を子ども達が走り回り、木の枝や泥で、それぞれに遊びを作り出していました。

#### きっかけは「私たちが子どものころより 今の子ども達は遊んでいない！」

「ひこうせん」が誕生したきっかけは、「自分たちの子どもの頃に比べて、今の子ども達は遊んでいない」と感じたことでした。子どもと大人が心豊かに育ち合う環境をつくりたいという共通の願いを持った子育て中の母親15人が中心となって、2001年の夏に「子ども達の環境を考える ひこうせん」を結成しました。2004年にはNPO法人化し、2006年は公民館や公園などを利用して年間150回以上の交流広場を開催しました。しかし、



活動がどんどん広がってくるにつれて、拠点となる場所がなければ活動を継続できないのではないかと不安が生じてきました。そんな時、タイミングよく知り合いの紹介で2007年に現在活動の中心となっているこの民家を借りることができ、「くるみの森」として持続的な活動を展開することができるようになりました。

### 新たな活動。広がるネットワーク

「ひこうせん」の活動で出会い、学びながら交流したメンバーが新たなグループを結成し、『冒険遊び場づくり』『乳幼児の遊び場・おひさまひろば』などの活動を始めています。地域の子育て支援活動が活性化し広がりつつあるのを感じています。地域の大学や行政、地域の子育て支援活動などにもネットワークを広げ、「岡山子育てネットワーク研究会」での活動も行っています。

一方、地元の中学生との交流も進めており、乳幼児の親子に協力してもらい、学校を訪問して家庭科の時間に子育て体験をしてもらっています。授業後の生徒たちの感想文を読むと、今後も続けていかなければと強く思います。また、中学校で「チャレンジワ



ク」という仕事体験を行います。保育の仕事の体験先として、中学生を受け入れています。

名称：NPO法人 子ども達の環境を考える ひこうせん

活動開始：2001年8月

スタッフ：代表の赤迫さんをはじめ、理事4名、運営スタッフ8名が中心になって運営している。日常の活動には、ボランティアを含めて約20名が参加している。会員は約100名。会員は賛助会員、ボランティアなど活動の担い手となってくれる人たち。

活動：毎週月曜日から木曜日までが、「わくわくるーむ」（10時～15時）。土曜日は「くるみひろば」（10時～12時）。2008年は年間延べ7,500人の親子が集った。「くるみの森」の登録料は年間300円。「あそびえん」毎週月曜日10時～12時で、月100円。

連絡先：〒705-0003 岡山県備前市大内1054-5  
TEL.0869-66-9366

## 厚生労働大臣賞 未来大賞

### むくどりホーム・ふれあいの会

北海道札幌市 代表者：柴川 明子

#### 公園とホームが一体化した、誰にでも開かれている場所

活動内容：「赤ちゃんからお年寄りまで、障がいのある人もない人も共に集いお友達になりましょう」を活動理念に、バリアフリー公園である藤野むくどり公園と、公園前の代表者宅を用いて活動。



#### 受賞の言葉

北の端の私たちの小さな活動に目を留めていただき、驚きと共に大変、感謝感激いたしております。「障がいのある人もない人も、赤ちゃんからお年寄りまで、違いを認め合ってお友達になりましょう!」を目指して活動を始め、15年目に入っております。活動の歩みは、まことに遅々たるものであり、目的達成までには、まだまだ沢山のやりたいたいことがあります。ほんの少しでも障がい理解を通して、共生社会に近づきたいと願っています。

このたびは、このすばらしい受賞に大層励まされました。参加者皆が協力し合い、知恵を出し合い、創意工夫しながら、新たな思いで、これからの活動を進め、交流の輪を一層広げていきたいと願っております。本当にありがとうございました。

#### 誰にでも共に集いお友達になりましょう

「赤ちゃんからお年寄りまで、障がいのある人もない人も共に集いお友達になりましょう」が活動理念です。互いに違いを認め合い、尊敬し合い、交流し合えることを願って活動を始めました。「先に来た人は後から来る人を出迎える」「その日の参加者がその日のスタッフ」「私の出番(自分の特技)で各々の力を発揮する」「お互いに、今日出会えて嬉しいね!と思ひ合う」を大切に発足当初から活動しています。

#### 札幌市郊外の住宅街で活動

むくどりホーム・ふれあいの会は、札幌市郊外にある藤野地区の住宅街で活動しています。地域内の人たちだけでなく、近隣の小中学生はもちろん、バスや車を使ってやってくる人も少なくありません。

主な活動は、乳幼児親子の交流ひろばのほかに、小学生の総合学習、中学生・高校生・大学生のボランティア体験や研修など。講師を招き「アロマでリラックス」や「アンデルセン手芸」「わらべ歌」などの講習会、「私の子どもはチャレンジD」の話し合いの会も随時開かれています。鯉のぼり会、クリスマス会などのイベントの他、8月には地域の人たちや支援者も参加する大規模な公園開園記念会が開かれて、とても賑やかです。



## 公園とホームが一体となっている

「公園の存在が大きい。」スタッフも参加者も口をそろえてそういいます。ホームと一体化して、閉塞感のない空間を作るとともに、だれにでも開かれている場所を作り出しています。おもいきり遊べる公園と、ゆっくりと休むことのできる施設が併設されているので、濡れた服を乾かしたり、手を洗ったりと子どものケアをすることができます。

みんなで一緒にお昼ご飯を食べることができることも魅力。子育て中は、子どもと母親2人きりになる時間が多く、中でもお昼ごはんの時間というのは、なかなか外では過ごせない時間だということですが、ここではゆっくり食べられると好評です。

## 代表者の長年の思いが込められた活動

若いときに盲学校の生徒親子と出会い、障がいを持つ子どもが地域の中で他の子ども達と遊ぶ時間もチャンスもないことを知り、ぜひそのような場所を作りたいという願いを持ちました。その後、カナダで子育て家庭支援センターを見学し、活動を開始するための具体的なイメージをつかみました。15年前、自宅前に札幌市が住民の意見を取り入れたバリアフリーの「むくどり公園」を造成する際に、公園が目的に沿って有効に使われるように自宅を開放して、赤ちゃんからお年寄りまで、障がいのあ

る人もない人も誰もが気軽にふれ合える場として、むくどりホーム・ふれあいの会を発足しました。

名 称：むくどりホーム・ふれあいの会

活動開始：1995年9月

スタッフ：代表の柴川さん、副代表の前田さんの他に20名程のボランティアスタッフ。

活 動：週3回（月、火、土）10時から16時までの活動日は平均30名程度の参加。イベントなどはもっと多い。会員制・登録制・予約制でもなく、参加費無料の自由参加である。参加者は、そのつど参加者名簿に記帳する。活動報告は毎回、むくどりホームページのむくどり日記に記載している。むくどりホームだよりは3ヶ月に一回発行。

連絡先：〒061-2282

札幌市南区藤野2条1丁目13-10

TEL.011-591-7035



## NPO法人 MMサポートセンター

福島県南相馬市 代表者：谷地 ミヨ子

### “生きにくさ”を抱える子どもたちの支援センター

活動内容：ADHD、アスペルガー症候群、高機能自閉症、学習障がいのある子ども達の支援センター。  
「通常クラスに在籍」しながら、生きにくさを抱える子ども達を、言語聴覚士が中心となって支援。

#### 集団の中での自然な訓練

障がいを持った子どもたちにとって、集団の中で生活することが一番の課題です。センターでは、土曜日にグループワークによる訓練があります。先生が決めたリーダーを中心に子どもたちが自発的にグループを作ります。この「グループを形成することから訓練が始まっています。周囲と協調することが不得手な子どもたちが、それぞれいろいろなつまづきを繰り返しながら作業を進めています。

#### 「親の会」も活躍

センターに通って来る子どもたちの親も、「家庭環境が子どもの病気の原因ではないか」といった風潮にさらされて、迷い悩み、人に言えない思いを抱えてきた人が多いようです。親たちも共に悩み合える仲間を求めて動き始めています。母親中心の「発達を支援する親の会・おんりい・1」をはじめ、就労支援や職業体験などでは「父親の会」が活躍しています。

母親の一人は、「子どもに障がいがあることが分かったときはショックだったが、障がいだと分かったことによって、対応も出来るようになった。MMサポートセンターは、施設の設備は立派とは言えないが、指導者、スタッフ、そして親の会も含めて、子どもへの思いが溢れている場所」と語っています。

#### 偏見と無理解を克服するために

現在では、ADHD、アスペルガー症候群、高機能自閉症、学習障がいなども世間に認知されるようになりました。しかし、MMサポートセンターの指導で子どもの症状が改善されていくと、学校側にもう支援の必要はなくなったと捉えられてしまいトラブルが起こるケースもあり、まだまだ認知・理解促進の必要性を感じています。

名称：NPO法人 MMサポートセンター

活動開始：1989年4月

スタッフ：運営はボランティアも含めた15名程度のスタッフが中心。常勤のスタッフは6名で、保健師や言語聴覚士などが子どもたちの指導を行っている。

活動：MMサポートセンターでの「指導」は毎週火曜日から日曜日。火・水・日は8:00～12:00、木・土は8:00～18:20。「学習指導」は水・金の17:00～18:30。日常的に指導・相談を受けている子どもたちは一月に延べ250人（実数で190人）程度。時々参加する子どもを合わせると、一月に延べ300人程度が利用している。

連絡先：〒979-2453 福島県南相馬市鹿島区小池字原畑123  
TEL.0244-26-5300



#### 受賞の言葉

受賞の知らせを受け、私達 MMサポートセンタースタッフ、そして親の会の仲間たちと、思わず手を取り合って喜び合いました。何かにつまずく時に、かならず話題になるのは発達障がいへの理解の低さです。時に、あきらめてしまいたくなくともあります。しかし、今回このような素晴らしい賞を頂く事になり、大きな喜びに続き、私達の小さな活動が大きな波となって、発達障がい児への理解を深めるきっかけになっていくに違いない、と身の引き締まる思いを強くいたしました。私達の活動の原点は「子ども達の笑顔」。子ども達のがのびのと、キュートでユニークな個性を伸ばしていけるよう、大人がそっとサポートしていく。その原点を忘れずに今後も明るく、そして何よりも前向きに活動してまいります。



\* 子育て支援活動の表彰 \* 未来賞

## 特定非営利活動法人うていーらみや

沖縄県那覇市 代表者：仲本 千佳子

わらべうたに込められた子どもへの愛情、子どもを育てる人への愛情が伝わる  
活動内容：沖縄に古くから伝わるわらべうたを通した「親と子どもが一緒に楽しむ」子育て支援。

### 親の支援だけではなく「親と子が一緒に」

わらべうたを通して子育てをする親の支援だけではなく「親と子が一緒に楽しむ」ことを大事に活動しています。わらべうたや、歌に合わせた遊びなど、子どもも楽しみ母親も楽しむ内容になっていて、初めての人も違和感なく活動に溶け込んでいけます。親も子どもも笑顔が溢れています。

先日も「毎回楽しいし、母親同士で話ができるのがいい。お弁当を持ってきて、子どもと食べて帰る」と言うお母さんグループの傍らで、初めて参加したというお母さんが「友人に聞いて来たが、楽しかった。自分の子ども以外の子ともと接することができるもいい」と話しながら、入会の手続きをしていました。

2008年度は延べ463組もの親子が参加し、遠く県北部の東村や本部町から毎週通ってくる親子もいます。

### キッズクラブが発展

「うていーらみや」は、母と子の居場所づくりのために駐車場でカンケリなどを始めた「てい〜だキッズクラブ」(1997年結成)の活動の中から生まれました。2000年にNPO法ができたのをきっかけに、子育て支援のNPOをつくろうという機運が高まり、2003年にうていーらみやを設立し、翌年からわらべうたの活動を始めました。毎週の活動以外に、公民館・公共施設での講座を年間100カ所程度行うほか、週に1回ラジオでわらべ歌を紹介しています。

### 収集、伝承、保存

うていーらみやは、地域のわらべうたの収集と共に人材育成にも力を入れています。

沖縄では子守のことを「守姉」(ムイアニ)といいます。毎年30人程度「守姉養成講座」をうけた「守姉」

が、県内6カ所(北部、中部、南部それぞれ2カ所ずつ)の親子わらべうたの会でスタッフとしてかわり、わらべうたの収集、伝承、保存を行っています。

名称：特定非営利活動法人うていーらみや

活動開始：2003年4月

スタッフ：わらべうたなどの講師を務められるのは30名ほどいるが、常時活動しているのは20名ほど。スタッフは全員無給のボランティア。

活動：年間150組の親子が参加している。会費は年会費が2,000円、毎回500円である。

連絡先：〒903-0802 沖縄県那覇市首里大名町1-277  
TEL.098-886-5083



### 受賞の言葉

このたびは、「未来賞」の授与をいただきましてありがとうございます。スタッフ一同、心より感謝申し上げます。

1つ1つの「わらべうた」に込められた計り知れない先人の思いや願いや祈りに触れることは、子どもだけではなく、子育てに関わる全ての人々をエンパワメントしていくと思います。

これからも、守姉のような深い愛情と温かい眼差しで子どもの「育ち」を見守り、優れた沖縄の子育て文化をわらべうたを通して歌い継いでいきたいと思っています。



## 『知ろう!小児医療 守ろう!子ども達』の会

東京都杉並区 代表者：阿真 京子

### パパ・ママが子どもの病気の基礎知識を持ち、 納得できる医療が受けられる社会を目指して

活動内容：パパ・ママの不安を減らすため、子どもの病気の基礎について、  
小児科の先生から直接学べる講座を企画・実施。

#### 一人の動きが大きな輪に

長男が9ヶ月のときに45分もけいれんが続く病気で、真夜中の救急外来に駆け込みました。そこで目にしたのは、あふれかえる子どもたち、待たされていた親、必死に働く医師や看護師の姿でした。「自分の子はどうなるのだろう」と不安を抱きながら、小児医療の現実を目の当たりにしました。その後、「小児救急を利用した9割は入院の必要がない軽症患者であった」という厚生労働省の報告を読んだことをきっかけで、自分も小児医療について勉強しようと強く思いました。しかし、学ぶ場を探してみましたがなかなか見つかりませんでした。そこで、自らで学ぶ場を企画し、親向けに小児医療について知る機会をつくろうと、実際に動き出しました。ブログなどでの情報発信によって少しずつ小児医療の実態の認知が広がっていき、正しい認識を持ってもらうことができてきました。

会を始めたころはたった一人での活動でしたが、講座を開催するたびに応援してくださる会員の方が増えています。また、全国に講演やメルマガ原稿の執筆に協力してくださる先生方もいます。

#### 子どもの病気は、どうしても慌てる

コンビニ受診が問題となっています。また、子どもが病気になった場合、普段の様子を知らない父親や祖母が不安を煽り、救急外来が不必要にもかかわらず病院に連れてくるケースが少なくないのです。母親だけでなく、父親や祖父母に子どもの病気について知ってもらふ必要性も感じています。

2009年、西新宿保健センターと共同で子どもの病気に関する小冊子を作成し、管内の3、4か月健診ですべての子どもに配布しました。新宿区では、2010年度から区内全域で配布する見込みです。また、受診の際に医師が知りたい、体温・食欲・機

嫌などを記録し、限られた診察時間を親が聞きたいことにさくために「コミュニケーションノート」を作成し、出生届を出したお母さん全員が手にすることを目指しています。

名称：「知ろう!小児医療 守ろう!子ども達」の会  
活動開始：2007年4月

スタッフ：講座、ウェブ、メルマガなどを担当するコアメンバーが20名ほど。メンバーのほとんどが仕事をしながら会の活動を行っている。会員が全国に約70名ほど、無料のメルマガ読者は200名以上。会員は乳幼児の子どもを持つ母親が中心。現在、全国に20名以上の協力医があり、講演やメルマガ原稿の執筆を依頼している。

活動：主催講座は年に3回程度、ママ・サークルや自治体との共催講座は2、3か月に一度のペースで、親向けに子どもの病気についての講座を開催するほか、子どもの病気に関するメルマガの発行などを行っている。講座は多くても40名以下で実施し、小さなお子さん連れの参加者が多いため、託児サービスを設けている。

連絡先：〒166-0013 東京都杉並区堀ノ内3-50-7-201  
TEL.090-3506-1491

#### 受賞の言葉

未来を担う子ども達のために小児医療を守りたい…その思いがこの受賞に繋がったのではないかと、メンバー一同受賞の知らせを大変ありがたく頂戴しました。また日頃より会の活動にご協力いただいている皆さんに感謝申し上げます。我が子を心配するパパ・ママの不安を減らし医師の負担を軽くすること、それが重症の子ども達を守ることに繋がる、という思いで、ひとりでも多くの方に小児医療に関心を持ってもらいたいと活動してまいりました。医療者や患者、行政、マスコミ…違う立場の方々とは立場を越えて協力し合い、今よりよい医療を明日の子ども達に手渡せるように一歩一歩できることをしていきたいと思えます。受賞をきっかけにさらなる一歩を踏み出そうと思えます。ありがとうございました。



## わくわく未来塾

大阪府寝屋川市 代表者：藤本 英祐

### 熟年人生で培われた経験・知識・技術を、子どもたちを通して社会に還元する

活動内容：熟年世代が今後もいきいきとした人生を満喫するために、平和学習や昔遊びなど人生の中で培ってきた経験・知識・技術を社会に還元するための活動を行う。

#### 高齢者だからこそできる活動

「わくわく未来塾」の主な活動である平和学習は、活動に協力してくれる会員が子どもの頃経験した戦争について、直接子どもたちに語りかけるもので、地域でも高い評価を受けています。

2009年12月、寝屋川市立三井小学校で平和学習が行われました。「わくわく未来塾」から7名の会員が出かけていき、6年生を対象に戦争体験を話しました。人によって話のテーマは違いますが、自分の小学校の卒業アルバムの写真を見せて、当時はみんな藁草履を履いていた話など、疎開の体験、空襲の体験、満州での敗戦体験、当時小学生だった時の話を、それぞれが用意した手作り資料で話を進めました。

児童からは、「資料では見ていたが、実際に話を聞いて勉強になった」「嫌いな食べ物があるが、これからは頑張ってお食べようと思った」「体験した人から話を聞いて、怖さが実感として伝わった」などの感想をもらい活動を続けていかなければと思うばかりです。

#### ボランティア養成講座から発生

2001年、寝屋川市社会福祉協議会が「まだまだ“熟年”役立つ塾」という元気高齢者ボランティア養成講座を行いました。この講座に参加した高齢者が、講座終了後、せっかくの知識や体験を活用したいとの思いを形にしたのが、「わくわく未来塾」です。

平和学習、伝承遊び、布ぞうり、囲碁教室など、年間80回程度の小中学校での教育活動、年1回の「わくわく未来まつり」や月3回の絵本の読み聞かせ会の開催などのほか、月2回の新生児4カ月検診の際には、荷物運びや赤ちゃんの抱っこ、兄弟の子守、案内など保護者が安心して受診できるようにサポートしています。

名称：わくわく未来塾

活動開始：2002年1月

スタッフ：現在、会員は42名。平均年齢は65歳くらい。「わくわく未来塾」は任意団体。会費は月100円で年間1200円。伝承遊びの際にプレゼントする紙風船代などに充当。他の団体に比べて男性会員の比率が高い。

活動：平和学習、伝承遊び、布ぞうり、囲碁教室など、年間80回程度の小中学校での教育活動、年1回の「わくわく未来まつり」や月3回の絵本の読み聞かせ会の開催などのほか、月2回の新生児4カ月検診の際には子育て支援も行う。

連絡先：〒572-8533 大阪府寝屋川市池田西町28-22  
市立総合センター 寝屋川市社会福祉協議会内  
TEL.072-838-0400



#### 受賞の言葉

戦後64年が過ぎ、戦中・戦後の生活体験者が少なくなっています。私達の活動は、会員のそれぞれの地域、環境、年齢差による生活の中での実体験を小中学生に話し、現在の生活との違いを感じてもらい、戦争から得るものがなく、いかに失うものが多いか、平和が大切であるか、を伝えております。実施の後には、給食の残飯がめっきり少なくなり、物を大切にするようになったという効果も報告してもらっています。また、はねつきやこままわし、お手玉など、日本に古くから受け継がれてきたあそびの伝承も行っております。こういった小さな活動を認めてくださったことに感謝しております。これからも熟年力を発揮してがんばって活動していきたいと思っております。



伊東 あゆみ [お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科]

研究テーマ：日本語学習者の読解における協同的活動の効果の検証

**研究内容** 第二言語・外国語としての日本語教育の分野では、近年協同的な学習（ピア・ラーニング）が注目され、多く実践されるようになってきている。読解授業を対象にした実践研究は増えつつも、どのような協同的な活動が理解にどのように影響するかという視点での実証的研究はまだ少ない。本研究は、(準)実験的な研究方法を用い、協同的な学習での読解過程とその効果を検証することを目的とし、読解研究のみならず、教育現場にも貢献していきたい。さらに一人の日本語教師として、研究的視点を持った実践のあり方も考えていきたい。

#### 受賞の言葉

このたびは、助成対象に選んでいただき、とても嬉しく思っております。夫が海外赴任中のため子育てを1人で担い、そんな中乳がんも経験し、今回のことは「それでも、研究を続けていいんだよ」「あきらめなくてもいいんだよ」と背中を押してくれるものとなりました。この「プロジェクト」をはじめ様々な形で子育て支援に力を尽くして下さる方々に、感謝いたします。

岡村 佳代 [お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科]

研究テーマ：ニューカマー生徒が経験する困難とその対処行動



#### 受賞の言葉

このたびは、助成対象者にお選びいただき、誠にありがとうございます。改めて、多くの方々に支えられ、今の自分があるのだということを実感しています。こちらの支援事業に尽力されている方々や、熱心にご指導いただいた先生方、そしていつも健気に私を応援してくれる娘や精神的な支えとなってくれる家族、すべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。今後も自分の研究に励みながら、何らかの形で、育児をしながら頑張っている女性のために、また、子どもを持つことの価値が再認識されることに、微力ながらお役にたてればと思っております。

**研究内容** ニューカマーと呼ばれる外国人の定住化が進む昨今、日本の学校におけるニューカマー生徒も増加の一途をたどっている。彼らは家庭と学校、社会の間で二つ以上の異なる文化を同時に体験することで、様々な困難を経験していることが予想される。そこで今後の一連の研究を通し、ニューカマー生徒が経験する困難とその対処行動について、属性や親子関係などの関連要因も含め、包括的に明らかにすることを目的とする。以上のことから、より適切で予防的な、学校と家庭、地域コミュニティーが一体となったニューカマー生徒への支援を提案していきたい。



糊澤 令子 [日本女子大学大学院 人間社会研究科博士課程後期]

研究テーマ：子育てにおける葛藤場面ストーリー作成と負の感情生起の検証

**研究内容** 子育ては、子どもに対する愛おしさや親自身の自己成長を感じることがある一方、イライラや大変さを感じることもある。これは自身の子育てで体験で実感し、乳幼児とその親とを対象にした心理臨床経験で共感するところであるが、今回の研究では、特に子育てにおける負の感情に注目し、この負の感情が生じるエピソードを実験的に取り上げる。実験で生じる不安感情や怒りの感情に焦点をあてることで、虐待やうつ的な状況が生じる要因や、予防教育的視座を探ることが本研究の目的である。

#### 受賞の言葉

子育てに関わる心理臨床活動を経て、自らの出産を機会に再び研究の道に戻りました。したがって、臨床活動で得た経験と学問的研究を融合させていくこと、また、自らの出産や子育ての体験を研究に十分活かすことが、私の課題であると考えています。研究は斬新な創造性とコツコツ積み上げる持久力とが必要と思いますが、今回の助成は、精神的にも経済的にも心強いバックアップになると思います。今まで支えてくださった方々に感謝を忘れず、助成は研究への期待と考え、邁進したいと思っております。この度は誠にありがとうございました。



## 齊藤 愛 [ 筑波大学大学院 ]

研究テーマ：日本の近代国家形成期における外国人と日本人の関係—表象の観点から

### 受賞の言葉

**研究内容** この研究が対象とするのは、日本の幕末から明治初期までの、外国人と日本人の関係を扱う文化表象である。明治維新を境に、日本はヨーロッパを起源とする近代的な人種観を受け入れ、今日に至る外国人像の基礎が作られた。1850～90年代の文学作品を中心に、絵画・文献資料に表象された外国人の身体と存在をめぐる日本人のまなざしを、同時期のオリエンタリズムなどに代表される外国人側からの記録も参照しつつ分析する。異文化が交錯する中で自己像と他者像が双方を補いながら形成されていく過程を考察し、その問題点を探る。

刀折れ矢尽き、研究自体を諦めようとしているときでした。思いがけないお電話をいただいたのは…。これほど強い励ましはありません。なにか大きな力が私の人生に介入し、「やりとげなさい」と背中を押されたような気がしています。それはおそらく、自分のキャリアのためだけではなく、世界をよりよくするために。大不況下、このような助成活動をあえて続けてくださっているプロジェクト関係者の皆様に心より感謝申し上げます。いつも支えてくれる友人たち、先生方、夫と両親、そして私の子どもたちに心から愛と感謝を伝えたいです。

## シュンカ 春花 [ 東北大学大学院 国際文化研究科 ]

研究テーマ：日本語とモンゴル語のことわざの比較—ことわざに見られる男性観と女性観の意識とその変容について

### 受賞の言葉

子育てと研究の両立の難しさの中、研究をあきらめようという考えは何度かありました。しかし、子供たちには夢と目標をあきらめたママの姿を見せたくないという思いで、今は一生懸命頑張ろうと思っています。今回の「女性研究者への支援」を受賞できましたことは私にとって大きな励みになります。本当にありがとうございます。そして、いつも陰で応援してくれている母に感謝しています。また、いつもお世話になっている先生と保育園の先生に感謝しています。これからも子育てをしながらいい成果を出せるように研究に取り組んでいきたいです。

**研究内容** 私の研究対象は社会構成の重要な要素である「男」と「女」に関したことわざである。日本語とモンゴル語のことわざにおける男性観と女性観について考察することによって、社会と文化の相違だけでなく、性差別や女性問題といったジェンダーに関わる問題も浮かび上がってくるものだと考えられる。また、特定のことわざは時代の変化により使われなくなってしまうものもあり、人々の男性観と女性観の変化と強い繋がりがあると思われる。現地フィールドワークを行い、このようなことわざの変化とそこに反映される男女の意識の変化を解明したい。



## 田中 淑江 [ 日本女子大学大学院 人間生活学研究科生活環境学専攻 ]

研究テーマ：染織品保存修復技術に係る能装束の形状研究

### 受賞の言葉

**研究内容** 染織品修復で機会が多い作品に能装束が挙げられる。能装束の形状研究は少ないのが現状である。そこで今回、現存する桃山時代から現代までの能装束の形状を分析し、科学的視点から、その結果を修復に役立て、将来的に文化財保存修復の分野に貢献することを目的とする。研究方法は、能装束の実物調査を行い、詳細な寸法データを収集しそれらを分析し、時代ごとの傾向を見る。現時点で約200領のデータを収集し、分析しているが、今後更に研究を継続することによって、能装束の形状変遷を明確にしていきたいと考えている。

このたびは、助成対象者に選んで頂きまして誠にありがとうございました。女性が研究と育児を両立させて、夢や目標を達成するためには、協力者の方々への支えがなくては成り立たないことを日々実感しております。今回の受賞は、研究を継続するための励みとなりました。研究テーマの「能装束の形状研究」を、文化財修復活動に生かし、社会に貢献すると共に、実りある研究結果を出せるよう努力いたします。この支援事業者の方々、いつも励ましご指導下さる推薦者の先生方、また全面的に協力し支えてくれる家族、両親に心より感謝申し上げます。



**山口 睦** [東北大学 東北アジア研究センター]

**研究テーマ：贈答記録からみる家族とジェンダー：日中比較の文化人類学的研究**

**研究内容** 香典帳や祝儀帳などの贈答記録は、日本の家庭において時に数百年間、記録、保存される。そこでは、家父長制、家制度といった観念からはみえない家族の実態、女性の生活とその変化を連続的に捉えることが可能である。本研究では、山形県南陽市のある農家に保存されていた1772年から2003年までの贈り物に関する記録を分析する。また、日本より厳格な父系出自集団を形成する中国において文献調査、ならびに現地調査を行う。同じ漢字文化圏である日本と中国の贈り物に関する記録の比較を通して、両国における家族の有り方を分析し、相互理解の一助としたい。

受賞の言葉

このたびは、助成対象者に選んでいただきまことにありがとうございます。これまで指導してくださった先生方、調査に協力していただいた方々、研究と家庭の両立に理解を示し支えてくれた家族に感謝いたします。博士課程在学中に息子を産んだことを後悔はしていませんが、出産後は、研究をあきらめて子育てに専念した方がよいのではと思うこともあります。この賞によって、子育ても研究も両方あきらめずに頑張ってきたことを認めていただけたと思います。これを励みに、より充実した成果が出せるように頑張っていきたいと思っています。

**梁 熙貞**

[関西学院大学大学院 言語コミュニケーション文化研究科]

**研究テーマ：在日コリアンのバイリンガリズム—オールドカマーとニューカマーをめぐる—**



受賞の言葉

このたびは助成対象者に選んでいただき心より感謝しております。2009年度は自分の研究者としての素質、家計のことなどで私を悩ませた年でした。悩んでいるところ指導教授から「未来を築く子育てプロジェクト」を紹介してもらいました。このプロジェクトに選んでいただいたことにより、この二つの悩みが解決できました。本当にありがとうございます。また、いつも影で支えてくれる家族と仲間へ感謝いたします。これからも子育てと研究の両立を楽しみ、そして社会に貢献できるような研究成果が出せるように頑張りたいと思います。

**研究内容** 本研究ではニューカマー（在日コリアン）の言語使用実態をアンケート調査により、社会言語学的な側面から解明する。また、オールドカマーの言語生活は韓国語を使うことは少なく、日本語のモノリンガル化が進んでいることが解明しつつある。このようにモノリンガル化が進むことによどのような要因が関与しているのか。さらに、ニューカマーの存在はオールドカマーの言語使用にどのような影響を与えているのかを明らかにしたい。本研究から、近年日本国内で直面している多文化共生社会の言語に関する課題に対する取り組み方が示唆できるのではないかと思う。



**渡辺 明美** [早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科国際関係学専攻 博士後期課程]

**研究テーマ：自立発展性を目指した教育協力に対するプロジェクト形態別比較研究**

受賞の言葉

**研究内容** 日本のODAの理念は「途上国のオーナーシップを尊重した自助努力支援の重視」である。援助終了後、プロジェクトが発現した効果が持続、或いは持続の見込みがある、という自立発展性の視点は重要であり、途上国のオーナーシップに大きく関係する。しかし近年、援助のモニタリングや評価の重要性が叫ばれ、目標の達成度を重視する成果主義が高まっている。故に自立発展性や持続性よりも、援助の有効性や効率性、インパクトに重きがおかれていると考える。以上の背景から、中でも社会的、経済的、文化的背景からの影響を受けやすい教育協力分野を対象とし、自立発展性を目指したプロジェクトについて考察し、今後の援助政策に対し提言を行う。

このたびは助成対象者に選んでいただき、大変感謝申し上げます。海外での調査や学会発表などで経済的な負担が大きく、子どもの手術も重なり精神的にも辛い状況でしたが、この受賞が大きな励みとなりました。子育て中の女性研究者が身近におらず不安や悩みもありましたが、このプロジェクトを通じ同様に頑張っている方々を知り、大変心強く思いました。プロジェクト関係者の皆様、先生方、家族全員に感謝いたします。研究テーマである国際教育協力は子どもが対象であるため、自らの育児経験を活かし、実りのある研究成果を出したいと思っています。

## \* 人文・社会科学系の女性研究者を取り巻く環境 \*

人文・社会科学系の女性研究者を取り巻く環境が  
厳しい状況にあるという認識で始められた本プロジェクトですが、  
改めて実際に研究を続けている研究者の方々に、その状況を伺いました。

### 第3回受賞者

山口 睦 さん [東北大学 東北アジア研究センター]



## Q. 子育てと研究の両立は難しいですか？

A. 住んでいる市では「就学中」も認可保育園の対象にしていますが、何時から何時まで授業を受けるというようなことが明記できない、カリキュラムのない大学院での研究は理解してもらいにくいところがあるようです。

## Q. 普段、研究をしていて感じることは何ですか？

A. 文系の研究はすぐに社会に役立つというものではないので、理系の人からも「研究の結果何ができるのか」ということを聞かれることがあります。文系の場合、研究テーマは一人一人違うので、研究にかかる費用についても一人一人で確保しなければなりません。理系の場合は研究室単位やプロジェクト単位で研究費を取得することができる点が大きく違います。

### 第2回受賞者

合田 美穂 さん [香港中文大学 歴史学科兼日本研究学科]



## Q. 子育てと研究の両立は難しいですか？

A. 子育てをしながらの研究は、熱を出したり、学校に呼ばれたりということがイレギュラーで起こるので、研究計画通りに研究が進まないところが難しいですね。研究にあてる時間にしわ寄せがくるので、多くの女性研究者がここで挫折するのだと思います。でも、「未来を築く子育てプロジェクト」のような支援があれば、育児サポートなどを使うことで時間の確保が可能になります。

### 第1回受賞者

田中 美和 さん [神奈川大学 経営学部国際経営研究所客員研究員]



## Q. 普段、研究をしていて感じることは何ですか？

A. 自然科学系の研究は将来的に活かせる成果が得られやすいので、民間の助成制度も少なくありませんが、人文・社会科学系の研究への民間支援で制度的にしっかりしているものは「未来を築く子育てプロジェクト」くらいしか思い当たりません。支援を受けてもっとも助かっているのは、研究に使う費用が「正当」で「自分自身のものである」という自信を持って研究に取り組めることです。もちろん、結果を出さなければならない責任感やプレッシャーは感じますが、この支援制度は始まったばかりなので、自分たちが道を拓く立場にあるということの大切さを強く感じています。

## \* 第2回 受賞者のご紹介 \*

第2回「未来を築く子育てプロジェクト」の表彰式および懇親会は、  
2009年2月16日(月)、ホテルニューオータニにおいて開催されました。



受賞者と実行委員の記念写真



お子さんも一緒に参加



会場の隣に託児ルームを開設



懇親会

## 第2回「未来を築く子育てプロジェクト」受賞団体の近況

### 「最年少中学三年生の後継者が頼もしい」



毎月一回開いている  
「わらべうたがいっぱい」の様子

### 和歌山おはなしの会 語りの森

**受賞で変わった環境** 受賞をきっかけに新聞やテレビでも活動が取り上げられ、昔話やわらべうたをしている会の存在を多くの人に知ってもらえました。活動を信頼してくれる人々も多くなり活動の場が増えたことで、多くの子どもたちに昔話を語ることが出来ました。昔話の語り手養成講座を受講した最年少の中学三年生は3つも話を覚え、近くの保育園や、自分の中学校の生徒全員の前で語りを披露しました。語り手を増やすために、養成講座を今後も開催します。活動の参加者は口コミで増え、遊んだわらべうたをすぐに親子で歌っているという、うれしい報告をもらっています。

## 第2回「未来を築く子育てプロジェクト」女性研究者の近況

### 「家族の理解を得て前向きに研究に取り組んでいます」

研究テーマ：古今和歌集時代（十世紀前後頃）の屏風歌—女性の関わりを視野に入れて—

#### 足立 綾子

**受賞で変わった環境** 受賞を契機として、家族の理解がより深まり可能な時は積極的にサポートしてくれるようになりました。今年6月には、新しい命を迎える予定で、家族は皆喜んでいますが、私自身は研究のことを考えると、育児との両立に今まで以上の困難が予想され、戸惑いもありますが、シッター制度などを利用して、研究にも前向きに取り組めるよう頑張りたいと思います。



### 「同じ立場にある若い女性研究者の励みになりたい」

研究テーマ：近代日本における女性美術家の連帯と戦争参画に関する研究

#### 吉良 智子

**受賞で変わった環境** 助成金によって研究に必要な環境が整備され、予定より1年早く博士論文を提出できました。受賞後は大学のHP等で取り上げていただきました。大学には私と同じように育児をしながら研究に取り組んでいる女性の院生が大勢いますので、微力ながら同じ立場にある若い女性研究者の励みになればと思っています。受賞したことが、研究者としての私を大きく支えてくれる柱のひとつです。



### 「子どもと過ごす時間を大切にしながら研究に取り組む」

研究テーマ：疾病・医療からみるドイツ社会国家の形成

#### 馬場 わかな

**受賞で変わった環境** 育児のために休学していた大学院に復学して研究を続けています。学会や研究会にも積極的に参加し、学会報告や学会誌への論文投稿も予定しています。学会や研究会が土日に入ることが多いため、平日に2日程度は、近所の公園などで一緒に過ごす時間を設けるようにしています。このプロジェクトのことを子ども家庭支援センターで案内したところ、私の専門に近い研究をしている方と出会い、頻繁に情報交換をしています。



### 「受賞で地域内の信用度もアップ。人と人とのつながりも広がっています」

#### 子育てボランティア「ハートフル」



お楽しみのランチタイム

**受賞で変わった環境** 参加者から活動を続けて欲しいという声をもらいながら、運営資金の確保について模索している中での受賞でした。近くに身内も親しい友人もいなくて不安を抱えながら子育てをしているお母さん達が、『にこりん』での出会いを通して人と人との温もりを感じています。商店街を歩くお母さん達がイキイキとした表情になっていくことで、『にこりん』が「必要な居場所」として地元の関係機関にも認知されてきているようです。「この町で子育てしてよかった」「ここが自分の育った町」とたくさんの親子が胸を張って生きていける町づくりを地域全体で目指したいと思っています。